Referee Time （審判だより６８号）

2023.1.11

Ｒ６･新年明けましておめでとうございます

審判長　前上里 亘

新年明けましておめでとうございます。
今年１年も皆様にとって素晴らしい年になることを祈念致します。

今回は、RefereeTime67 号で伝えました、年末に岩手県で開催された日本選手権女子の部で大会審判員も務めながら、同大会にて開催されたトップレフェリー研修会に参加した島尻真理子・比嘉由紀乃ペアより研修会の報告が届いています。

あくまでも、研修会の内容の**「紹介」**の形で、報告書をご覧下さい。
（各カテゴリーで実施するとか、競技運営に関係するものでないことを、
この場で確認しておきます）

第75回日本選手権大会（女子の部）参加報告

島尻真理子・比嘉由紀乃
（文責：比嘉）

岩手県花巻市において、12月24日(日)～28日(木)の日程で開催されました日本選手権大会(女子の部)及びトップレフェリー研修会に、今回、島尻真理子・比嘉由紀乃ペアとして参加させていただきました。今回の研修内容を皆さんと共有し、自身の審判活動だけでなく、女性レフェリーを含めた次世代審判員の育成、そして、沖縄県のハンドボール界の更なる発展に少しでもお役に立てればとの思いも込めて、報告をさせていただきます。

1．これからのレフェリング

「起こったことに対して判定するだけ」の時代から･･･

⇒「チームと良好なコンタクトを取りながら、情報発信していく時代」へ！

> ハンドボールが、“好感がもてる”競技となるために、「安心・安全が保障され、子ども達がやりたくなる、チームが応援したくなる」ハンドボールを目指すことが『世界で戦える日本のハンドボール』に繋がる。

（1）IHF、JHAが抱える近年の課題

① Simulation（シミュレーション）
違反がないにも関わらず、違反があるように見せかけて「レフェリーの判定を欺こうとする行為」

② Provocation（プロボケーション）
接触はあるもののこの接触があたかも攻撃側に違反があるように見せかけるためにDFが相手の方向へと動いて接触したあとに後ろへ倒れる等といった「違反を誘発させる行為」のこと。

③ Overreaction（オーバーリアクション）
違反はあるものの、必要以上に「大げさに見せかける行為」

④ スポーツマンシップに反する行為

> レフェリーとして、試合の中で起こり得る事象を予測し、違反行為に対し基準を示すだけでなく、近年、国内でも増加傾向にある上記①～④の課題（競技規則 8:7～8:10）に対しても、予防的行動を踏まえながら競技開始15分で基準を示すことが重要！（ペア間だけでなく、審判団全体として統一の見解を）

2．レフェリーとしての研究課題と、それに対する見解や視点、考え方のポイントなど

※ 特に、以下の(1)～(3)は、点差が開きがちな女子のゲームに多く見られる課題

（1）攻撃有利の判定になってはいないか？（第8条はDF、OFの双方に同様に適用される）

- 1番最初にDF側を見る（ゴールレフェリーの視点は防御側から）！どちらが先に位置を取っているのか？
- DFとOFの位置関係やゴールエリア際の攻防をしっかり見極める。
- ブロックプレーの位置の取り合いをどう見るか。（肩幅より広い脚、肘を使う、ユニフォームを掴む行為は短時間であってもOFの違反。逆に、先に位置を取り、受け身できちんと立っていれば長時間でも違反ではない。）

・ウィングエリアの「ロングフットではない状態で、先に位置を取り、気を付けの状態で静止」は正当なDF。しっかり認めてあげる。そこにOFがぶつかればオフェンジブファールもあり得る。

（2）試合終了間際での「ミスがない」運営（終わり方を意識し過ぎて“吹かなく”なっていないか？）

・「負けているチームだから･･･」「終わり方を意識するがあまり」「体力や集中力が落ちた」がために、吹かない、吹けない状態とはなっていないか？

・前後半60分を通して一貫した笛。

・試合展開に関係ない。負けているチームに加担する必要なし。

・「攻撃の方向性を変えない」という視点。

（3）ハーフタイム、チームタイムアウトといった、中断後の再開時における「集中力」

・このタイミングで、「自身も心身共にオフモードに入ってしまったため」「伝えたことへの安堵から（レフェリーの気が抜けてしまう）」特にミスが起こりやすくなる。

・後半は、「新たなゲームが始まる」と考える。（DF 形態や攻撃スタイルの変更、選手交代など）

・タイムアウト後、ハーフタイム後の集中力や気の入れ方。

（4）予防的行動としてのコミュニケーション：大きなボディーランゲージ(以下、BL)で全体へ知らせる

・実際に起こった事象に対して正しいBLをしているか？（例えば、突き飛ばしのプッシングなのにホールディングのBLだと違和感。選手が反論するという余計なことにも繋がりかねない）

・接触の瞬間、CRが近づき「近くで見ている」ことを行動で示すことでより危険な行為に発展するのを防ぐことができる。

（5）バランス(両レフェリーが、両チームに、同じように、同じ基準で)を意識したゲームマネジメント

・1試合を通して、同じような事象に対し、両チームに同じ判定をくだせているか。(基準の統一)

・ペアのバランス。例えば、インカムを通してペアで見解をすり合わせる。「今の厳しい？」「OK」など。

3．その他、プレーヤーの「安心・安全を保障」したゲームマネジメントを行う上でのポイント

・“ハンドボールたるものの特性”を前提としつつ、その行為の意図は何かを考え、局面を見極め、そこに競技規則を当てはめていく。（プレーヤーの視野に入っているかどうか、当たり始めはエリアの中か外か、接触の位置は正面なのか横なのか、利き腕側なのか、ボールに対しての接触かそれとも体なのか、体であればその部位はどこなのか…等、トータルで考えて罰則の付加の有無を含めた判定を行う！）

・相手への危険性を軽視した違反行為には、必ずペアで寄って協議が必要！

・判定をくだす際は手順が大事！

例えば、シュート時の違反だった場合、「7mのBL→タイムアウト→選手の安全確認→違反の種類のBL」の手順。手順を間違うと、ベンチから「7mでしょ！」等の余計な声やアピールなどTDへ飛び火してしまうこともある。

・例え角度の狭い所からのウィングシュートであったとしても、足を出そうとする行為（ロングフット）は即2min＋7m！

（IHFの見解）「しようとする行為」は認められない。足に乗った、当たってしまったらRed！接触の有無ではなく、その行為が明らかにシュートに影響を及ぼしているかどうかが重要。毅然とした態度で示すべき。

・倒れている選手に対しては必ず反応する。放置はダメ。（途切れたタイミングで）

・ペアでの協働作業。GKの頭部への直撃（シューターとGKの間のDFの有無、DF側の違反の有無、シュートの軌道）や、スローオエリア付近の事象(横切り、味方の有無、GKの責任あるスロー)など。

・各種スローの実施においてすれ違い際に、スローをしようとする手からボールを叩き落とそうとする行為→スポーツマンシップに反する行為！即座に２分間退場。
・ボールやコートから決して目を離さない！シュートで“業務終了”ではない。（シュートのブロックを試みながら相手の顔を叩くこともあり得るし、シュート後の振り下ろした腕が相手の顔に当たることも）

４．ビデオ判定システム（以下、ＶＲ）の使用について
※ 日本協会として今後各種大会に VR を導入するかは未定ではありますが、今大会（男女ともに）では国内大会初の試みとして導入されましたので、本報告書に記載させていただきます。

（１）VR を使用する基準
・「映像による確認」が必要な場面に適用。ただし、依存はダメ。ペアとしての見解を予め持った上で確認する。確認したい事象をカメラが捉えているとは限らない。

（例） 失格を判定したい事象の確認の際に
得点が入ったかどうかが観察できなかった際に（30：00 以内かどうかの確認も含めて）
競技終了３０秒間の違反か、あるいはその前に行われた違反か確認が必要な場面で
GK の頭部直撃かどうかの場面で、GK に Simulation の疑いがある
不正入場や交代が行われたが、誰が違反の対象か分からない　…など

・レフェリーが明確に見えている場合は、VR を使用せずに判定しても問題なし。（例えば、広げた手による顔へのアタック→即 Red！ただし、握りこぶしなら報告書ありの可能性。これを確認する場合は VR を使用する）
※ VR 使用後の“誤った判定”となってはいけない。

（２）使用の手順
① VR 使用前
・ペアと使用の必要性を確認してから VR の BL。
・確認は、基本的にレフェリーのみが行う。（事実判定はレフェリーが行うため TD、MO は同席しない）
② VR 使用中
・見解案を持った上で映像を確認。（ゴールインかどうかの事象なら人が多く集まる必要なし）
・不正交代等の事象であれば TD１名も同伴。
・確認する際には、どのアングルのカメラを使用するかは大切となる。
・見解だけでなく、「選手の番号確認＋再開方法」まで持っておくこと。
※ 映像を確認している間も「競技中断中」。コート上の管理も必要！
③ VR 確認後
・MO に見解を伝える。
・笛を吹きながら VR の BL→判定と再開方法のＢＬ（得点、７ｍ、対象選手への罰則等を慌てることなく示す）
※ ①～③までに、あまり時間をかけることなく運用すること

５．今大会及び研修会を振り返って
今大会を通して、レフェリングにおける自身の課題やペアとしての課題を改めて見つめ直すことができました。そして、判定の精度を高めるためには、試合の局面を理解した上での正しい見解を習得することが重要

であり、それが“根拠のある強さ”に繋がるということを、身をもって学ぶことができました。また、研修の中で印象的かつ重みを感じたのは、「選手生命に関わるような行為を排除する責任がレフェリーにはある」という言葉です。「行為の危険性をいかに選手・ベンチに伝えるか、安心・安全が担保されたゲーム運営をいかに行うか」がレフェリーにとって最も重要であるということを肝に銘じ、毅然とした態度で判定できるよう、これからもより一層研鑽を積んでまいります。